

突撃！隣の梅花講

自性院講

講師さま さま



前日の嵐が嘘のような日本晴れ。
今日は高島町にある自性院講にお邪魔いたしました。

見事に手入れされた山門のような二本の松をくぐると、ちりんちりんと鈴の音が聞こえてきました。

十二月の検定に向けて、週一回の練習会が始まっています。今日は昨日の台風の影響で、四人での講習です。一曲目は入寂御和讃です。法具を伴ったひとりずつの詠唱ですが、難しい転調部分もしっかりとお唱えができてます。続きまして正法御和讃。自性院講では、初心者も上級者も一緒に講習を受けるのが伝統のようです。

伊藤詠範によるみっちりした講習が一時間続きます。



お楽しみの一服です。自性院講は毎回午後一時半から四時までの講習だそうです。
「疲れませんかーとお聞きすると

「くたびんねー 疲れない」

「こうして息抜きするもんだし」

「好きな事だからくたびれない」

間髪いれずに答えが返ってきました。

自性院講の歴史は古く、住職のお母さんの時代から数えて今の講師さんは四代目 虚空蔵講中として発展したと住職さ

んはお話して下さいました。最初の頃は男性の方もいて、毎月お勤めしていたそうです。

—梅花を始めたきっかけは—

始めて二年の方は、葬式での御詠歌を聞いて

「ああ、御詠歌っていいなあと思って」

「私は友達に誘われ入りました。夜の部でした」

夜の部？しかし昼の部、夜の部と先生タフですね。

詠範 「若い時培った体だからタフなんです」

「私は友達に誘われて。梅花のぼの字も知らなかったけど始めたら、のめり込んでしまいました。その後、白房を受けるのまだ早いと反対する先生に受けさせて下さいと強引にお願いしたんです」

詠範 「唱え込みが足りないと思って反対したの。でも、だめ。その熱意に負けたの、私」

(笑)

「それからが必死」

—相当練習したのですか—

詠範 「相当なんでもんでない。私のほうが頭がおかしくなるほど練習しましたよ。あの時ほんとに苦しかった、私(笑)」



「あの時受けて良かった」

その時同じく白房を受けた講員さんは、網膜剥離変性症で経典が見えなくて、曲を拡大コピーして勉強してらっしゃいます。それでもほとんど見えないので、曲も所作も暗記するまで勉強したそうです。その努力に講員さんも皆感動しております。

「今もだんだん見えなくなってきたけれど、御詠歌が好きだから、先生の所に通っているの」

詠範 「私も好きだからここまでやれた。あと、仲間がいたからだね」

—先生は教え方がうまいですか—

「上手い」

「細かく教えてくださる。」

「人に対して厳しい」
「すかさず笑いながら住職さんがおっしゃると、

「自分には甘いけど」

とはにかみながら先生が答えました。

—どうぞ旦那様を大切にして下さい—

詠範 「私がここまでこれたのは講員さんがいたからです。母が教えた講員さんも二人残っているの。その二人が一生懸命なの」

「覚えるのは大変」

「だけど、先生に厳しくしてもらったからよかったんだ」

—厳しいんですか—

「(全員) はい(笑)」

詠範 「経典一冊覚えなければ白房の意味はないと思って」

「検定曲十四曲教えてもらってから受検したの」

「でも、それが力になった」

「ここでは、初心者もベテランと一緒に講習を受けます。それで、曲になじむので、検定の時楽になるのです」

「面白くなるまでが大変なんですよ」

—面白くなるまで何年かかりましたか—
「んだなく七、八年かな」
—七、八年も?—

「今は面白いですよ」

詠範 講師さんいないと、私ここまでこれなかった。講師さま さまです。本当に講師さま さまです。そして、母がいたからです。だから、今は感謝しかないです。ありがたいと思います。やっぱり、講師さま さまです」

(笑い)

—旦那さまさまは—

「旦那さまさまは別格です」

(大笑い)

「でも先生も最近まるやかになつてきたよ。」

「最近教え方が厳しくないよ」

詠範 「そう思う?」

「みんな言ってるよ」

なんでも言える講です。終始なごやかで、あったかい雰囲気は、ご住職様と奥様の講師さんを思いやる心から生じているような気がします。

とても居心地がいいので、まだまだ、ここに居たい気になりました。

後ろ髪 (ないですが) ひかれる思いで家路につきました。



自性院講の皆さま、ありがとうございました。

※宗務所企画 「隣の梅花講」、次は長井の洞松寺講へうかがいます。

(このたびの取材は平成二十八年八月三十一日にさせていただきます。)

自性院講 (高畠町)

講長 伊藤 隆壽

指導者 伊藤 良子

興味のある方は

【0238】570326【まで

お問合せください